

〔Book Review〕

ブタ礼讃

H.D.ダネンベルク著（原題：Schwein Haven）
福井康雄訳，博品社，2,400円，249頁。

わが国では佛教伝来以前，日本書紀にみられるように，仁徳天皇，雄略天皇，欽明天皇などの条のうちに，猪甘^{いかい}，猪名部^{しらいのたべ}，白猪田部^{いかい}あるいは猪飼^{いかい}，猪養^{いかい}などの名がみられるが，これらは朝廷への豚肉の調達を行っていた役人である。また同書紀第三卷神武天皇戊午年には，天皇東征のとき，弟猾が牛や酒を天皇の将兵にふるまい，天皇がそれによって将兵をねぎらったことが記されている。さらに「続日本紀」第十一卷，聖武天皇の天平4（732）年秋7月の条にも，「丁未，詔，和買畿内百姓私畜猪四十頭放於山野，令遂性命」とあり，当時畿内の農民は豚（猪）を飼っており，天皇に献上していたことが明らかである。しかし，佛教思想からくる戒律がでるにおよんで以後明治にいたる千数百年の歴史のなかで，わが国は豚とは無縁となり，したがって豚に関する文化史は完全に欠落していた。一方，中国や朝鮮では佛教によって食肉の習慣が禁じられることなく，一部の僧侶を除けば豚や豚肉料理の文化は数千年の歴史をもって今日に至っている。この点がわが国ときわだて異なるところである。

さて，西欧のユダヤ教徒やイスラム文化圏ではいまだに豚肉を忌避し，これを食わない。しかし，紀元前千数百年前，メソポタミヤにおけるハンムラビ王の教典には豚に関する記載があり，また美男のアドニス神が猪に化身し，これが打たれた時，その死をいたみこれが数千年に及んだということ

からも，ユダヤ教成立以前には豚肉忌避の思想はどこにもなかった。しかし，メソポタミヤのウルに住むアブラハムに神からの啓示があり，その地を捨てて今のイスラエルに遊牧の民として逃避した子孫がモーゼを始祖とするユダヤ民族を形成し，ここから豚が穢れたものとして排除されるに至る。これについては旧約聖書レビ記に明らかであって，「蹄がふたつに別れていても胃がひとつしかない動物を食べてはならない」とある。以後今日に至るまでユダヤ教徒はこれを厳守し，イスラム教徒もこれに従っている。初期のキリスト教徒は自分達はユダヤ教の一分派という認識があったため，豚肉を避けていたが，布教活動がローマ，ギリシャに及んで状況は一変する。すなわち，ローマを始め，ヨーロッパでは古来豚を常食しており，ケルトやその後のゲルマン民族も同様である。ことにローマでは豚肉は好まれ，その時代のキリスト教徒も例外ではなかった。ここにおいて，キリスト教は完全にユダヤ教から分離され，2～4世紀に豚肉を常食とするヨーロッパ人のなかに浸透していく。中世期の僧院でも豚は飼育され彼等のもっとも好むものとして食卓を飾ってきた。ことにドイツの農民は今に至るまで血の一滴も無駄にすることなく，ソーセージにしてしまう。

著者ダネンベルクはこのようなヨーロッパの豚の文化史を背景として，おおよそ豚に関する逸話を余すところなく書き綴っている。荻野アンナに

云わしむれば「人類の胃と心の友、豚を巡る豚・走・曲」ということになる。一体このダネンベルクの専門は何だろうと思うほどにその内容は豊富にして興味ぶかい。私の専門からみても、トランスジェニック豚からSPF豚まで最先端の研究分野にまで言及していて敬意を表する。そして次から次へと興味ぶかい話題を提供してくれる。豚の神聖と魔法、シンボル、コインに切手。病気に霊薬、豚を主題にした物語、ことわざ。そして豚肉料理とくる。

わが国では、自分の子供を「豚児」とへりくだり、東大の某総長は卒業式に際して「太った豚になるより、やせたソクラテスになれ」と訓告する。どうみても豚は賤しみの象徴である。ヨーロッパ

のそれに比べて先入観がまるで違う。英国の作家ジョージ・オウエルの著作で「アニマル・ファーム」は有名である。家畜の農園主が動物達から追放され、その農園は動物によって自主的に運営されるようになるが、その時権力を握るのがナポレオンという雄豚である。馬鹿では務まらないポストであって、ここにわが国で豚をみる目とまるで異なっているのに気付くのである。その視点でここに豚が登場してくるので私どもはいやが応でも読むにつれ本書にひき込まれる。また本書によって更めて私どもの豚に対する知識のレベルが問われ苦笑せざるを得ない。最後に、本書は非常に読み易く名訳であることに敬意を表したい。必読再読の書である。
(評者：波岡茂郎)

ブタ・ア・ラ・カルト



傘に守られた豚くん。SPF豚にとっての傘とは何なのでしょう。
(写真提供：アップジョン ファーマシューティカルズ リミテッド)